

「十字架とリンチの木」

2014年05月02日

ジェイムス・H・コーン著『十字架とリンチの木』（日本キリスト教団出版局）を衝撃をもって読んだ。黒人解放の神学者ジェイムス・H・コーンはニューヨーク・ユニオン神学校の教授で、諸々の問題を鋭く提起する本を多く著している。2011年に書かれた『十字架とリンチの木』は「私の今までの全著作の継続であり、完成点である」と言っているように、読む者に強く、深い悔い改めを迫る。

キリスト教は、主イエスの十字架に「救い」を信じる信仰である。十字架は、ローマ帝国への反逆者が受けた、拷問と辱めを伴った公的な見世物で、人間が考案した最も屈辱的で痛みのひどい処刑であった。主イエスの十字架の歴史的事実は、エルサレム神殿当局、ローマの総督・ピラト、群衆、そして弟子たちから受けたリンチ以外の何ものでもない。この十字架に、人間救済を見るということは、苦難と死が最後ではなく、敗北から希望が来るという価値観の逆説である。この逆説の承認は、謙虚さと悔い改めの信仰によってのみ可能となる。

コーン教授は、米国史の惨劇とも言うべき黒人たちを吊るした「リンチの木」と主イエスの「十字架」を重ね合わせている。「黒人は翌日の明け方まで吊るされた。―それは筆舌に尽くしがたい、ぞっとするような恐ろしい恐怖であった」。(レイ・スタナード・ベイカー) このようなリンチを1880年から1940年までの「リンチ時代」に、白人キリスト者たちによって五千人以上の黒人男女は受けてきた。コーン教授は「リンチの木に吊るされた黒人のイメージを通してイエスを捉えることなしに、われわれは本当に、ローマの十字架にかけられたイエスの神学的意味を理解できるであろうか」と問いかけている。そして「人間の救いは死刑宣告された犯罪人イエスの十字架において啓示されており、したがって人間の救いは、われわれのただ中にある十字架につけられた人々とのわれわれの連帯を通してのみ有効となる」。また、「死と敗北の象徴を、神は解放と新しい命のしるしに変えられたのである。十字架は、日ごとに大いなる不正から苦しんでいる、『これらの最も小さい者』、社会において無用とされる者との神の愛の連帯を表す、最も力強い象徴である。キリスト者は、恐るべき悲劇であった十字架と向かい合い、かつ信仰と悔い改めを通して、その中にある永遠の救いの解放的喜びを発見していかなければならない」と言う。

苦難を負って苦しむ者との連帯において、主イエスの死の意味（救いの事実）を見出すというコーン教授の神学は、福音の真理の核心である。

私たちが生きている現実、残酷で理不尽なリンチとも言うべき事件が日常的に起こっている。これらのリンチ事件は、主イエスの十字架と関わっていると捉えるところで、私の問題となり、乗り越えていく可能性が生まれるのではないか。リンチで受けた傷は贖罪的な意味を持ち、それゆえに、主イエスの十字架が、苦難と死を希望と命に変える逆説をもたらしてくれるからである。